

Sport
Godzilla®

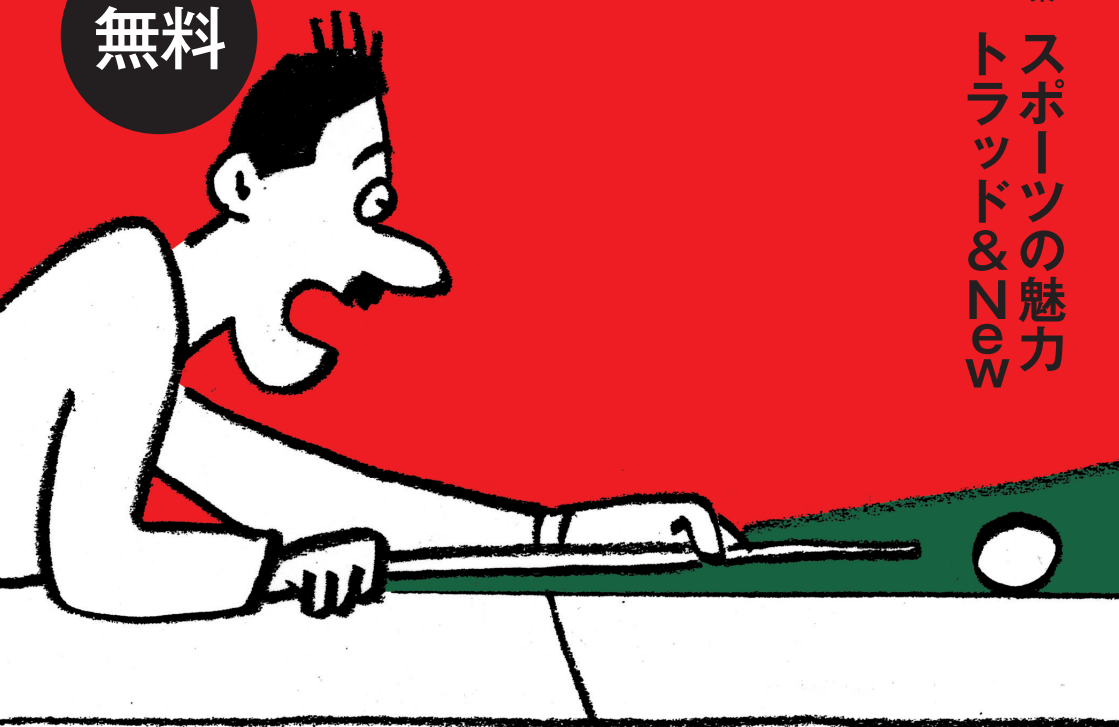
スポーツ ゴジラ®

第 56 号

無料

特集

スポーツの魅力
トラッド & NEW



スポーツ振興くじ助成事業

「ゴジラ」は東宝株式会社の登録商標です。
『スポーツゴジラ』は、日本スポーツ学会が
商標使用の許諾を受け、スポーツネット
ワークジャパンが発行しています。

2	第56号を発刊するにあたり	長田 渚左
	■特集■	
	「スポーツの魅力 トラッド&New」	
4	日本人初プロボクシング世界王者 —— 白井義男	川本 凜太郎 ^{構成}
12	サッカーの戦術進化	荻島 弘一
18	第6回 日本スポーツ学会大賞受賞記念インタビュー再録 大事なのは歴史に学ぶこと —— 賀川 浩	阿部 雄輔 ^{構成}
30	2022年夏 賀川浩氏に訊く	
32	忘れ難い男 —— サッカーを愛して60年 渡邊 隆	長田 渚左 ^{取材}
34	愛するフットボールでクラマー氏は何を伝えたのか	河端 隆志
40	アーバン(都市型)スポーツ『ロボッチャ』って何!?	田村 崇仁 ^{取材}
46	『走』第3回 自動車レースは、安全運転を競う競走!?	玉木 正之
47	夢劇場『馬』No.28「チャンス到来か!?	長田 渚左
48	バックナンバーのご案内	

南 伸坊 表紙のつぶやき

「ビリヤードはスポーツなのか?と、疑問があったけれど、eスポーツがスポーツなのだとすると、ビリヤードも立派なスポーツ。心を動かし、脳を動かす、ビリヤードは楽しい。」

スポーツネットワークジャパンHP <http://sportsnetworkjapan.com/>
バックナンバー第43号～55号はホームページからもお読みいただけます。

『スポーツゴジラ』は、種目を問わずスポーツそのものの魅力や
価値を語るスポーツ総合誌（フリーペーパー）です。

第56号を発刊するにあたり

編集長 長田 渚左



思い起こせば、昨夏の東京オリンピック大会は、開幕前から問題が噴出し、逆風の嵐が吹き荒れた。

コロナ禍の緊急事態宣言下での開催強行に、反対の声は世論調査で7割を超えた。

何が起こるか分からない不安を抱えた中、ほぼ無観客での大会になった。しかしそのような状況の中でも、懸命に戦うアスリート一人一人の熱とパフォーマンスは、多くの人々の心に響き、殺伐とした空気を和らげ、豊かにしてくれたと思う。胸を打たれる瞬間がたびたびあったと感じる人は私だけではないと思う。

大会後のNHKの世論調査では「開催できてよかった」という声が過半数を超えた。

ところが今年、開催1周年を迎えた頃に、大会のスポンサー選定をめぐる受託収賄容疑で、組織委員会の元理事が逮捕された。

またしても「オリンピックとカネ」の闇が浮き彫りになった。利権構造と金満主義。情けないやら、しらけるやら……スポーツそのものに泥を塗られたようで悔しい。

そこで今回は気分を変えて『スポーツの魅力 トラッド&NEW』という特集を組んだ。スポーツはどんな人が、どのような立場、思いで関わるかで、さまざまに違った輝きを放つ。そんな魅力を、かみしめてほしい。

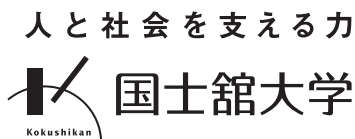
『スポーツⅡカネ』と思われるのはあまりにも寂しい。

私自身はスポーツに救われたという思いを人生で何度も経験してきた。だからスポーツの価値を広めべく、無料総合誌スポーツゴジラを刊行している。スポーツの真の力を、56号で味わってほしい。

ご協賛およびご協力企業・団体



WOWOW



文藝春秋



立ちどまらない保険。

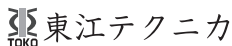


三井住友海上



株式会社東美物流

JWCPE 日本女子体育大学



公益財団法人
住友生命健康財団

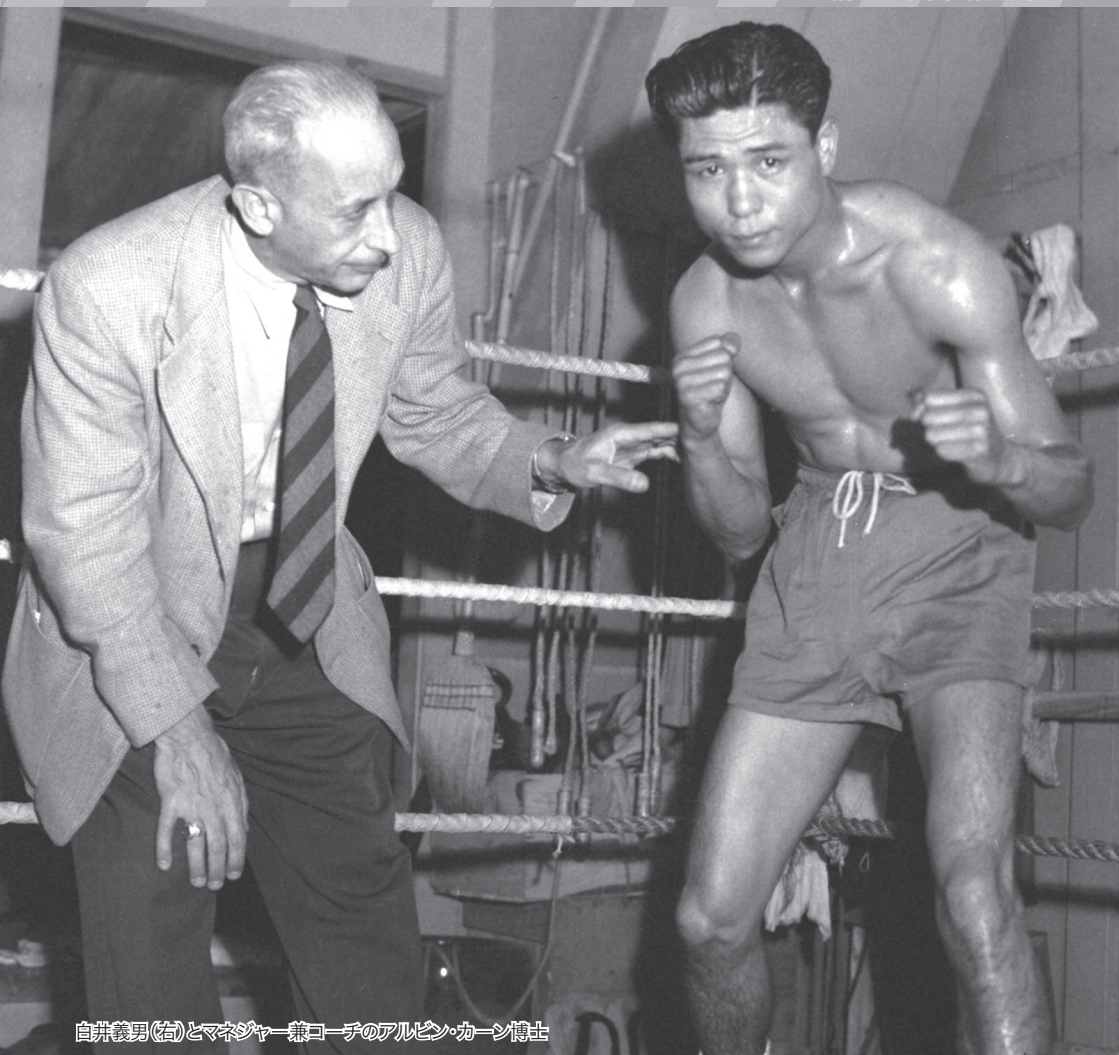


(順不同)

スポーツの魅力 **トラッド&New**

日本人初プロボクシング世界王者——白井義男

構成 川本凜太郎



白井義男(右)とマネージャー兼コーチのアルビン・カーン博士

プロボクシング世界フライ級王者の白井義男さん(享年80)が、日本人初の世界王者になって今年で70年。終戦7年目の1952(昭和27)年5月19日、後樂園球場で王者グド・マリノ(米国)を3-0の判定で下して、世界王座奪取に成功した。世界への扉を開いた白井さんの実像と偉業について、ボクシング観戦・取材歴60年を超える共同通信社の津江章二氏に聞いた。(聞き手 長田渚左)



長田渚左



津江章二氏

長田 今年は白井義男さんが日本人初の世界王者になって70年。そこで本日は長年にわたってボクシングを観戦・取材してこられた共同通信社のベテラン記者・津江章二さんに、白井さんについてじっくりとお話をお伺いします。津江さんはいつ頃からボクシングを見ているのですか？

津江 初めてテレビで観戦したのが1959年、小学2年生のときですから、もう63年も見ています。

長田 63年もボクシングを愛し続けておられる。どんなところに魅力を感じたのですか？

津江 強烈だったのが、1965年にファイティン・グ原田さんが、『黄金のバンタム』の異名を取った無敗の世界バンタム級王者エデル・ジョフレ（ブラジル）に判定勝ちする大番狂わせを起こして、フライ級に続く2階級制覇を達成した快挙です。すごく感動して、あの思い出が今につながっています。

長田 私は中学生のときに世界フェザー級王者の西城正三さんが大好きで、そこからボクシングに興味

を覚えました。当時、私がテレビでボクシングを見ていると母が大変嫌がつて、何という娘なんだという感じで席を立つことがよくありました（笑）。

ところで現在の日本は、かつて日本人には歯が立たないと言われたミドル級で、村田諒太が竹原慎二さん以来2人目の世界王者になって、今年4月に王座統一戦も実現させました。バンタム級では井上尚弥が、6月にノニト・ドネアに2回TKOで圧勝して世界3団体統一王者になりました。井上はその後、日本人で初めてパウンド・フォー・パウンド（PPF）の1位にランクされました。これは階級の違いを超えて、現在、世界で誰が最強なのかを専門家がランキングしたものです。今、日本は世界のボクシングの中心になっている気がするのですが？

津江 確かに米国で一番権威のあるボクシング専門誌『リング』が選定したPPFで1位になったように、井上の評価は世界でも非常に高いですね。ただ、日本だけではなくて米国、メキシコ、英国も現在は

非常に活況を呈しています。

素質を見抜いた眼力

長田 それでは時代をさかのぼって、1952年、昭和27年のお話です。この年の5月19日に白井義男さんが日本人で初めて世界王者になりました。終戦後、わずか7年。日本国民はこの快挙をどんな思いで見えていたのでしょうか？

津江 敗戦で日本人は元気をなくしていました。そんな当時の国民に力を与えてくれたのがスポーツでした。水泳で世界記録を連発して『フジヤマのトビウオ』と言われた古橋廣之進さんとともに、日本人の希望の光になったのが白井義男さんでした。日本の期待と注目を浴びた国民的ヒーローでした。

長田 白井さんのマネジャー兼トレーナーについていたのが、アルビン・カーン博士という米国人でした。生物学者でもある彼はGHQ（連合国最高司令官総司令部）に所属していて、専門は食品でしたが、

ボクシングにも精通していました。カーン博士は白井さんのどこにひかれたのでしょうか？

津江 カーン博士は理学博士という肩書も持っていて、スポーツにおけるタイミングというのを勉強されていました。それで1948（昭和23）年の夏、銀座のジムを見学していたときに、大勢のボクサーが練習している中、白井さんの放つ右ストレートに目がくぎ付けになったわけです。「これがナチュラル・タイミングだ」と。このパンチは必ず世界につながると思うって、「私が面倒を見たい」と白井さんに直接マネジャーを申し出たのです。

長田 戦前は確か8戦全勝（7KO）のホープだったそうですが、当時の白井さんは有望選手と見られていたのですか？

津江 それが本人は戦争中、海軍に召集されて、腰を痛めてしまい、戦後は低迷していました。カーン博士と出会った頃は、引退も視野に入れながら練習をしていたようです。

長田 すると、無名選手だったんですね。それでも白井さんが世界王者になる可能性を秘めていると見抜いたカーン博士の眼力には驚かされます。ではカーン博士が白井さんに伝授したボクシングとはどんなものだったのでしょうか？

津江 当時の日本のボクシングは、絶大な人気を誇ったピストン堀口に代表される、前進してパンチを打ち続ける『ラッシュ』が主流でした。とにかく手数で圧倒する、打たれても打つという根性論のボクシングです。一方、カーン博士が理想としたボクシングは、スピードを十分に生かしたテクニックと防衛主体のボクシングでした。

長田 ということは白井さんがカーン博士とともに目指したのは、当時人気の肉弾戦とは180度違うスタイルだったわけですね。

津江 そうですね。ピストン堀口の試合では、ラッシュに合わせて観客の「ワッショイ、ワッショイ」という声援が起きました。それが日本人にすごく受

けた。白井さんのボクシングはまったく逆です。あくまで冷静でテクニック重視。左ジャブを主体にしたアウトボクシングでした。

長田 アウトボクシングということはフットワークを使つて相手と距離を取つて戦うボクシングですよね。その指導を受けるようになって、白井さんの快進撃が始まります。日本フライ級王座を獲得して、さらに日本バンタム級王座も獲得して2階級制覇。日本人初の世界王座挑戦への機運が高まってきます。ところで白井さんが登場する以前もピストン堀口のような強い選手がいましたが、世界王座に挑戦した選手がいなかったのはなぜでしょう？

津江 当時、世界タイトルは日本人の手の届かない別世界のもと思われていました。また日本には世界戦を中立的な立場で統括するコミッションがありませんでした。それが白井さんの世界挑戦が現実的になったことで、世界初挑戦の1カ月前の1952年4月に急遽きゅうきょコミッションが設立されたのです。

長田 世界王座に挑戦する白井さんの相関図がとても不思議なんです。カーン博士は米国人です。一方、王者マリノもハワイ在住の米国人。つまり戦勝国の米国人の指導で成長した敗戦国の日本人の白井さんが、米国人と戦うという構図なんですね。

津江 実はマリノのマネジャーがサムノ瀬さんという福岡県から移民した日系2世で、彼が日本人の白井さんにチャンスを与えようと、実現に動いてくれたことが大きかったようですね。

長田 占領国でもある米国の世界王者に、敗戦国の日本人が挑戦する。当時の日本人にとっては、特別な思いがあつたでしょうね。

津江 そうです。カーン博士はマリノに挑戦するときに白井さんに「君は自分のために戦うんじゃない。日本人のために戦え」と言つたそうです。この言葉に白井さんはものすごく発奮したといえます。

長田 カーン博士は大変に広い視野を持っていたのですね。そして1952年5月19日、ついに白井さ

んのマリノへの挑戦が実現しました。マリノが来日して白井さんと2人でオープンカーに乗って、数寄屋橋のあたりをパレードする映像が残っています。歩道は大勢の人であふれ返り、ビルから紙吹雪が舞っていました。

津江 日本人が挑戦するプロボクシングの世界タイトルマッチが、それだけ当時の日本人にとって画期的なイベントだったということですね。

長田 会場は後樂園ホールではなくて、後樂園球場でした。4万人を超える大観衆が詰め掛けました。どんな展開が予想されていたのですか？

「ウェークアップ ヨシオ」

津江 白井さんは前年の51年にノンタイトル戦10回戦で2度マリノと対戦していて、後樂園球場での初戦は判定負けしたのですが、第2戦はマリノの地元ハワイで7回TKO勝ちしているんですね。なので年齢も王者より8歳若い白井さんが有利ではないか



会場の後楽園球場には4万人を超える大観衆が詰め掛けた

と予想する声が多かったようです。しかし一方では王者は15回戦の世界戦では本気になるから簡単じゃないという評論家もいました。

長田 当時はテレビのない時代で、試合はラジオ中継でした。結果は白井さんの3―0の判定勝ち。内容はいかがだったのですか？

津江 白井さんは前半は自重して後半勝負という作戦でした。その作戦通りに戦っていたのですが、7回終了間際にマリノの左フックを浴びて意識を失いかけたんです。フラフラとコーナーに戻ったときに、カーン博士に大きな手で背中をバシッとたたかれ、耳元で「ウエークアップ ヨシオ！」と大声で言われて、一瞬で目が覚めたと語っています。

長田 「起きろ、ヨシオ」と言われて、本当に覚醒して、また戦ったということですか？

津江 そうです。それで10回以降は自分のペースで戦って、ポイント差を広げていきました。3―0の判定で白井さんの勝利は明白でしたが、ポイント差



王者マリノ(右)と打ち合う白井義男

はそれほど開いてはいませんでした。

長田 戦後の日本人にとって白井さんの世界王座奪取は、とてつもなく大きな希望になったようですね。4万人の観客の中にはわずかな生活費しかないのに、安くはないチケットを買ってきた人たちも大勢いたのでしょうか。

津江 試合直後、カーン博士は白井さんに、球場のスタンドの一番上の方を指さして「お金がなくても応援に来てくれた、あの人たちの気持ちを忘れるな」と言ったそうです。白井さんは80年の生涯を終えるまで、ずっと謙虚な方だったのですが、そのカーン博士の言葉が非常に影響したそうです。

世界で8人の時代

長田 話は変わりますが、現在はWBA、WBC、IBF、WBOと4団体にそれぞれ世界王者がいて、17階級ありますから、単純に計算して4×17で68人の世界王者がいることになります。白井さんが世界王者になった70年前は何人いたのですか？

津江 8人だけです。

長田 たった8人？ 今は68人ですよ。確かに当時の資料を見ると、8階級の世界王者の中に白井義男の名前があります。誇らしい気持ちになりますね。

津江 当時の世界王者の重み、存在価値は今とは全

然違いましたよね。8人のうちのミドル級にシュガー・レイ・ロビンソンという名王者の名前があります。彼は今でも歴史上No.1と言われているボクサーなんです。そういった伝説的な王者と同じ時代に、肩を並べて白井さんの名前があるというのは、日本人としてうれしいですよ。

長田 白井さんこそ戦後の日本に希望の光をともした国民的英雄だと思いますが国際ボクシング殿堂には入っていません。ファイティング原田さんや具志堅用高さんは入っているのに、どうして白井さんは入っていないのでしょうか？

津江 ニューヨークのカナストータというところに殿堂があるのですが、設立が1990年なんですね。米国が運営しているので、日本はまだまだアピール不足なんです。

長田 白井さんを何とか入れてもらいたいですね。

津江 日本にも「白井さんを殿堂に入れなくてどうするんだ」という声がありますので、私も微力です。

がアピールしていきたいと思っています。

長田 日本には相撲や、プロ野球、サッカー、オリンピックには歴史や先人たちの功績を振り返る博物館やミュージアムがありますが、ボクシングはどうなのですか？

津江 残念ながらまだないです。歴史的な史料が散逸するのが一番まずいので、どこかにボクシング界の歴史的な記念品などを保存して、公開できるような博物館は必要だと思います。

長田 津江さんは長年、日本にボクシングの殿堂を作る働き掛けをしています。日本スポーツ学会でも応援をしたいと思います。

津江 それから来年は白井さんの生誕100年を迎えます。これも追い風にして、いろんな方の協力をおおいで、ボクシングの殿堂設立に向けて、ムーブメントを起こしていきたいですね。

（本稿は、2022年8月6日に東京・渋谷ハクジュ大研修室で開催した日本スポーツ学会主催第120回『スポーツを語り合う会』をもとに構成しました）

スポーツの魅力 トラッド&New

サッカーの戦術進化

スポーツライター
荻島 弘一

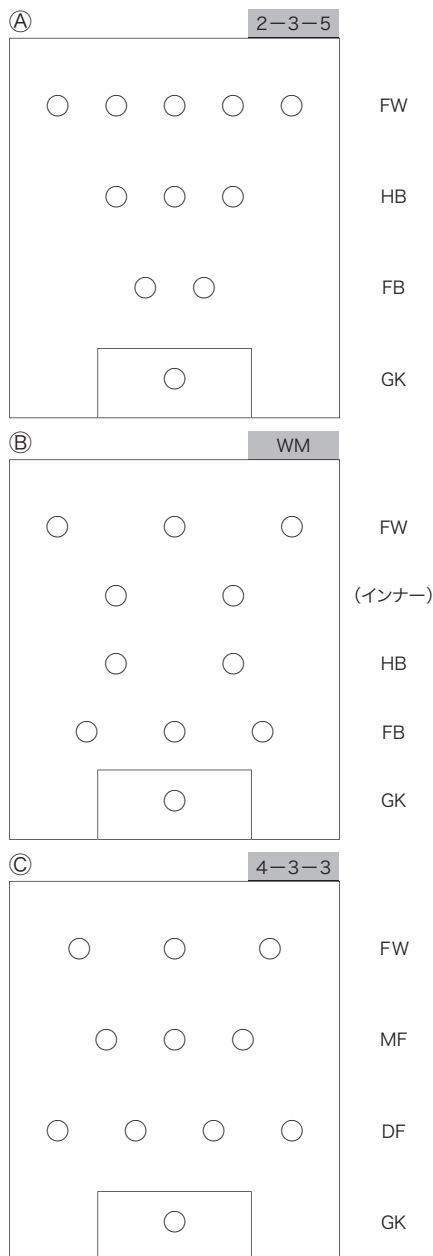


サッカーは単純なスポーツだ。1個のボールを22人で追い、手を使わずに相手のゴールに入れる。それだけのスポーツが世界中で愛されるのは、チームによって異なるプレイスタイル、戦い方があるからだ。単純だからこそ、複雑になる攻め方、守り方。11月にはカタールで「サッカーの見本市」ともいえるワールドカップが開催される。イングランドで統一ルールができた1863年から1世紀半あまり、急速に進化を遂げてきた「サッカーの戦術」を振り返る。

ラグビーと分かれた当初のサッカーは、多くの共通点が残っていた。ボールをキックする時は手が

使えたり、スローインはタッチラインと直角に入れた。何より大きかったのはボールよりも前の選手は全員がオフサイドになった点。前方へのパスは禁止、相手陣深く蹴りこんだボールを全員で追いかけた。GK以外の選手はオフサイドにならないように横一線、今風にDF、MF、FWの順で表記すれば「0-0-10」だった。

大きな変化はすぐにやってきた。3年後の1866年のルール改正。相手ゴールとの間に相手選手が3人（現行ルールは2人）いればオフサイドではなくなり、前方へのパスも許された。相手の前線への攻撃を止めるためにFB（フルバック）D



「F」を配置し、FWとのつなぎ役としてHB（ハーフバックMF）も置いた。選手の並びは「2-3-5」。各チームは、このGKを含めて上からみた「V」システムを採用した。（図①）

ショートパス戦術が広まった

初めて「戦術」を披露したのは、1872年にイングランドと初の公式な国際試合を行ったスコット

ランドだった。近代サッカー誕生以前からのロングボール戦法が抜けない母国に対し、ショートパスで対抗。体格に恵まれないためあえてフィジカル勝負を挑まず、パスで相手をおかしながらゴールを目指した。この試合は0-0だったが、この後10年間で対イングランド7勝2分け2敗。ショートパス戦法の優れた指導者が欧州大陸に渡り、各国にこの戦術を広めていった。

1925年にはオフサイドルールがさらに改正され、パスを受けるのに必要な相手ゴールとの間の守備側選手が3人から2人になった。攻撃側はさらに有利になり、得点も増えた。対抗するために守備の人数は増えて3人に。その前にMFを2人配置し、さらに5人のFWのうち2人のインナーを下がり気味に配置した。攻撃陣が「W」で守備が「M」。この「WM」システム(図⑧)が50年代まで欧州の主流となり、2つのスーパースチームを生んだ。

1930年代前半には、オーストリアの代表が「ヴンダー(奇跡の)チーム」と呼ばれて圧倒的な強さを誇った。1950年代前半には、ハンガリー代表「マジック・マジヤール」が4年間公式戦無敗という偉業を成し遂げた。

共通したのはポジションチェンジ。それまで自分の「持ち場」は絶対だった。しかし、オーストリアのセンターFWシンデラーは中盤まで下がり、あいたスペースを利用した他の選手にラストパスも出し

た。ハンガリーのヒデクチもセンターFWから下がり、そのスペースをプスカシユやコチシユが使った。当時の守備はマンツーマンが基本。相手の守備が混乱したのは間違いない。

1958年W杯で初優勝したブラジルも、ポジションの概念を打ち破った。「4-2-4」の4バックも攻めた。特に左右のサイドバックは積極的な攻撃に参加し、時にはFWを追い越してゴールに迫った。ブラジルは個々の選手のテクニクが注目されるが、戦術的にも高いレベルにあったのだ。

ポジションの枠や攻守の分業制を撤廃した「全員守備、全員攻撃」で世界に衝撃を与えたのは、1974年W杯のオランダ代表だった。布陣は4-3-3(図⑨)だが、クライフらが流れるように動き、相手ゴールを襲った。オーストリア代表やハンガリー代表が相手のマンマークを苦しめたポジションチェンジや高い運動性を踏襲し「トータル・フットボール」と呼ばれた。前線からのプレスで相手ボ-

ルを奪う守備は、「プレッシング」の基本となった。

守備の戦術化

戦術の進化で攻撃以上に注目されたのが守備の戦術だった。かつては相手にボールを奪われた瞬間に自陣に戻り、守備の陣形を整えて相手選手とのマンツーマンに備える「リトリート」が主だった。そんな守備の常識を打ち破ったのが、1980年代に黄金期を迎えたイタリアのACミラン。サッキ監督はオフサイドラインを巧みに操り、スペースをコンパクトにしながらプレスをかけ、相手ボールを奪った。74年ワールドカップでオランダがみせた守備戦術を、サッキ監督が進化させた。

「プレッシング」、特に相手陣深くからのハイプレスにはリスクもある。人数を割いて前がかりでプレスをかけるため、そこをかわされると後方には広大なスペースがあり、一気にピンチにもなりかねない。センターDFのバレージ、コスタクルタをはじめ

め、全員が優れた技術とスタミナ、そして高い守備意識を持っていたからこそできた戦術だった。

一方で、相手ゴールに近い位置でボールを再奪取することができれば、相手の守備が整わないうちの「ショートカウンター」で得点チャンスが増す。この後「プレッシング」は守備の基本として多くのチームが採用。世界のサッカー界に広まっていた。日本でもJリーグ創成期に横浜フリューゲルスに加茂周監督が「プレッシング」と「ゾーン・ディフェンス」を組み合わせた「ゾーンプレス」を披露して注目された。

最近では、ドルトムントで成功をおさめ、リバプールを率いるクロップ監督の「ゲーゲンプレス」が知られている。サッキ監督から影響を受け、プレッシングをさらに進化。相手ボールになった瞬間にFW陣がプレスをかけ、他の選手が続く。「ゲーゲン」とはドイツ語でカウンターの意味で、相手のプレスディフェンスにさらにカウンターのプレスを

浴びせるということ。相手がボールを奪った直後のわずかな時間がカギ。エキサイティングな守備戦術であることは間違いない。

かつてはマンマークが基本だった守備の戦術だが、今はゾーンで守ることが主流。リトリートする守り方もプレッシングをかける守備に移行していった。もともと、マンマークやリトリートがなくなっただけではない。時間帯や試合状況、相手との力関係など、戦術はあらゆる要素で変わる。また、体力的にも90分間プレスを続けることは難しく、守り方を使い分けるのが普通だ。守備の戦術は、さらに進化していくだろう。

役割の多様化

統一ルールが出来てからの150年という歴史は、サッカーを大きく変えた。分業化されていた攻守は一体となり、ポジションに与えられる役割も多様化した。攻撃選手には守備も、守備選手には攻撃

も求められ、ゲームのスピードは速くなった。かつてゲームメーカーと呼ばれた「10番」には時間とスペースの余裕が与えられていたが、戦術の進化によつて「伝統的な10番」は活躍の場を失った。

ポジションごとの人数も変わった。かつての「2-3-5」や「WM」ではFWが5人いたが「4-2-4」で4人に。「4-3-3」「4-4-2」となり、1トップも珍しくなくなった。戦術の進化とともに「FW」の人数は減り、ついに「0トップ」や「偽の9番」まで登場した。「9番」とは典型的なストライカーを意味する。バルセロナ時代のメッシはセンターFWでありながら、ほとんどを2列目でプレー。あいたスペースを他の選手が使う「偽の9番」だった。

もつとも、これも歴史的に見れば新しいものではない。90年前のオーストリア代表や70年前のハンガリー代表でもあったもの。戦術は、長い歴史の中で進化を繰り返す。背景には、ルール変更が影響して

いる。オフサイドルールなど大きいものは勿論だが、小さなルール変更、修正などでも戦術は変わっていく。1992年には、GKが味方の足によるバックパスを手で扱うことが禁止になった。それまではGKがバックパスを手で扱えることで過度に守備的なプレーを選べたが、それができなくなった。ボールを持つ相手DFへのプレスがより有効になるとともに、足技に優れたGKも育った。中にはDFラインまで上がって組み立てにまで参加するGKもでてきた。こうして、また戦術も進化する。

11月にはカタールでワールドカップが開幕する。かつては「世界のサッカー見本市」と言われたが、世界中の選手が欧州でプレーする現在では強豪クラブほどの影響力はないかもしれない。それでも、4年に1度世界が注目する大イベント。そこでも新しい戦術、スタイルが世界を席巻するかもしれない。今回は、さらなる進化が見られる大会になるのではと期待する。選手のパフォーマンスに大きく影響

する暑さや長距離の移動がないからだ。全会場が空調完備、カタール全土も秋田県ぐらいの広さしかなく、移動が負担になることもない。さらに、11月から12月は欧州シーズンの真つただ中で、厳しいシーズン終盤を戦い終えた6月の大会よりも選手のコンディションはいいはず。レベルの高い試合が見られることは間違いないし、より強度の強いプレッシングができる可能性は大きい。

もう1つ、大きなルール変更は交代可能選手数が3人から5人になったことだ。もともと新型コロナウイルス対策としての処置だったが、恒久化が決定。登録選手数も23人から26人になったことで、ベンチ入りする人数も増える。5人といえばフィールドプレーヤーの半数。守備選手をそっくり変えるとか、セツトプレーなどのスペシャルチームを用意するとか、夢は大きく広がる。どんな戦術が、このあと4年間世界のトレンドになるのか。サッカー戦術の進化は止まらない。

賀川 浩

さん

「大事なものは

歴史に学ぶこと」

構成 阿部雄輔



賀川 浩（かがわ・ひろし） 1924（大正13）年12月29日、兵庫県神戸市生まれ。41年、神戸一中の選手として第10回明治神宮大会優勝。特攻隊員として出征した太平洋戦争から復員後しばし浪々の生活を経て52年、産経新聞社に運動部記者として入社。64年、東京五輪5位／6位決定戦「大阪トーナメント」を企画。74年西ドイツ大会でW杯初取材。「サッカーマガジン」に「W杯の旅」連載開始。2010年、日本サッカー殿堂入り。14年、神戸市立図書館に「神戸賀川サッカー文庫」を開設。15年、FIFA会長賞を受賞。

2015年の日本スポーツ学会大賞受賞者は、90歳の現役サッカージャーナリスト・賀川浩さん。1924（大正13）年、大日本蹴球協会（現・JFA）ができてわずか3年後に神戸で生まれ、小学生の時からサッカーに魅せられる。特攻隊として外地に赴きながら出撃することなく終戦を迎えた青年は、一度は離れようとしたサッカーの世界に戻ってきた。52（昭和27）年からは記者、ジャーナリストとして日本サッカーの興隆をメディア側からバックアップし続けてきた。国内外のサッカーの発展に尽くした功績が認められ、2010（平成22）年に日本サッカー殿堂入りを果たし、15年にはFIFA会長賞を受賞。90歳とは思えぬ豊饒かきやくとした語り口、記憶力で自らの足跡や未来の日本サッカーへの提言を語ってくれた。

もともと私の家は医者の家系。江戸時代中期に賀川玄悦がわけんえつという人物がいて、この人は日本の産婦人科か

医の始祖ということになっています。指先の非常に敏感な人でね、触診で触って母体の中で胎児が頭を下にして入っているということを『賀川産論』という論文で発表している。これは今で言えばノーベル賞級の発見でしょう。

私の祖父も羽振りの良い医者でしたが、親父がまだほんの2歳か3歳の時に心臓麻痺で若死にしています。神戸の姉の嫁ぎ先に引き取られた親父は、医者にはならず貿易商になり、イギリスあたりとボタンの輸出輸入をしていた。

親父は英語がうまくて、商売柄外国人ともよくつきあっていたし、神戸という町自体の文化が西洋風というかハイカラな雰囲気があった。スポーツについてもKRAC（神戸レガッタ&アスレチッククラブ1870年創立）というクラブがあつて、そこでサッカーやラグビーや陸上競技や野球やテニスを楽しむ。六甲山の山の上には外国人の別荘があつて、別荘の横の溜池で冬氷が張るとスケートもしていた。

そういう影響でわが家もフィギュアスケートをはじめいろんなスポーツに親しみました。親父は野球も好きで、甲子園の今と言う高校野球、当時の中等学校野球大会にも連れて行ってもらいました。昭和8（1933）年の中京商・明石中の準決勝は延長25回戦の史上最長試合として有名ですが（中京商が1―0でサヨナラ勝ち）、翌日の中京と平安中学の決勝戦（中京商が2―1で勝利）は親父と一緒に見に行きましたよ。

兄・賀川太郎の影響でサッカーを始める

サッカーをやるようになったのは、賀川太郎（1922〜1990年。賀川さんの2歳年長の兄上。戦後を代表する選手の一人として2006年に日本サッカー殿堂入り）の影響です。兄は小学生の時は野球の選手だったんです。ピッチャーで四番打者で、同じ年齢にはのちにプロ野球選手になった別所（昭↓毅彦。南海、巨人で通算310勝）がいたんです

が、小学生の大会では兄貴の方が三振奪取王でした。別所さんは当時の学校の制度で高等小学校に行ってから2年たつて滝川中学へ行きましたから、中学では僕と一緒にの学年になって、明治神宮大会には別所さんが野球、僕がサッカーの兵庫県の選手団と一緒に上京したこともあります。

そういうわけで小学校の時は兄は野球で有名でしたが、うちの隣の家の二階に東京高等師範を出た河本春男という神戸一中のサッカー部長が下宿していたこともあって兄貴はサッカー部に引きずり込まれて。僕もサッカーをやるようになったんです。僕が通っていた雲中^{うんちゅう}小学校という小学校は、当時すでにサッカーが盛んでしたね。昭和10（1935）年頃の話ですが、サッカーはまだ全国的には普及していませんでした。雲中小学校では夏は野球、冬はフットボールというのが当たり前でした。

当時の日本のサッカーはどうなっていたかと言いますと、1930（昭和5）年に第9回極東大会と

というのがあって、この時に大日本蹴球協会、今のサッカー協会が初めて選抜チームをつくりまします。当時一番強かったのは東京帝国大学です。これよりだいぶ前、大正12（1922）年に野津謙^{のづみずる}という知恵者が、インターハイという旧制高等学校の大会を始めます。東大、京大に入る学生は旧制中学から旧制高校を出て東大へ行くわけですから、東大のサッカーを強くするためには高等学校にサッカーを普及しようということ、当時東大の学生で、のちにサッカー協会会長になった野津さんが始めた。おかげで良い選手が育つてちょうど昭和5年頃には東大が全盛で、東大を主力とする選抜チームをつくりまします。そしてこの第9回極東大会でそれまでなかなか勝てなかった中華民国と激烈な戦いをして3―3で引き分けて、初めて優勝します。それで大日本体育協会の中でもオリンピックに参加しようという機運が出てきたのが1930年、昭和5年のことです。私は幼稚園から小学校に上る前でしたので当然あとで先輩

から聞いた話ですが。

ところが1932年のロサンゼルス・オリンピックではサッカーという競技自体が実施されず、ようやく4年後、1936（昭和11）年のベルリン大会で、初めて日本代表がオリンピックに出場します。そして1回戦で優勝候補と言われていたスウェーデン代表チームと試合をして、3―2で勝つという大仕事をした。

ベルリンの屈辱を忘れないスウェーデン

私は1992年にヨーロッパ選手権がスウェーデンであつた時に、今の人が36年のことをどれだけ知ってるか、興味を持って調べてみたんです。ほとんどと言っていいほど若い人が知っていた。日本に負けて代表チームは大変だったと。帰ったら何を言われるか分かんので、チームはストックホルムのひとつ手前の駅で解散したとかですね。ラジオで試合を実況したアナウンサーは、日本人ががんがん走り

回って攻めてくる、日本人がそこにもここにもおるというので、「ヤパーナ、ヤパーナ、ヤパーナ」と叫んだ。そのアナウンサーはしばらく「ヤパーナ」という仇名で呼ばれたとかですね。そういう話を若い人が話すのです。おじいさんから聞いたとか父親から聞いたと。それぐらいオリンピックで日本に負けたのはスウェーデン側にとってはショックだったらしい。

日本ではサッカー協会は大喜びしたが、世間一般はあんまり関心はなかったと思います。ただ私たち後輩はベルリン・オリンピックの話をもう耳がタコになるほど聞かされましたね。36年のチームの中心は早稲田大学の選手です。当時は早稲田が強くて慶應がそれを追っかけて強くなってきていました。戦前の東京で一番人気があったスポーツはもちろん野球の早慶戦ですが、それ以外のスポーツでも早慶戦が盛り上がると人気が出る。サッカーの早慶戦も盛り上がって、明治神宮外苑の競技場、のちの国立競

技場が満員になってキックオフが遅れたというほど人気が高まりました。

ベルリン・オリンピックから5、6年が日本サッカーの戦前の最盛期、私どもの言う第一期黄金時代です。その頃私は中学生で、ベルリンに行った先輩から直接話を聞きましたし、スウェーデン戦で1点目のゴールを入れた川本泰三氏には公私ともにお世話になって、一緒に釣りに連れてってもらいました。戦後、いろんな先輩たちとサッカーをやったおかげで、戦前の黄金期の選手の中には相当うまかった人もいたということはいまだに肝に銘じています。こうして折角盛り上がったサッカー熱も、太平洋戦争で消えてしまいます。

特攻隊に志願。朝鮮半島で終戦を迎える

私は神戸一中から神戸大学の予科に進んでずっとサッカーをやっていたが、陸軍特別操縦見習士官という、学生から飛行機乗りになる制度があつて、私

のようなチビは重い背囊はいのうを背負って鉄砲かついで歩く歩兵よりは飛行機に乗った方がお国の役に立つだろうというんで志願したんです。

第413飛行隊という部隊に入って、これはいわゆる特攻隊、特別攻撃隊でした。特攻隊と言うと、死ぬために訓練したんですかと言うんですが、これは違うんです。陸軍では特攻隊のことを「と号部隊」と言います。軍隊には作戦要綱というものがあって、その第一条には必ずその目的が書かれています。それによれば「と号部隊」の目的は、「航行マタハ泊地ニ於ケル敵艦船艇ニ邁進衝突シコレヲ必沈シテ敵ノ企図ヲ殲滅シ以テ全軍制勝ノ根基ヲ確立スルニアリ」ということです。死ぬのが目的ではなくて、邁進衝突して相手の船を沈めることが目的なんです。衝突したらまあ死ぬやろということではあります。けど死ぬことが目的じゃない。ぶつからんことには爆弾が爆発しませんから、撃ち落とされる前に何とか相手の船にぶつかる。そのための訓練

をやったわけです。

結局出撃することのないまま朝鮮半島の38度線の少し北、今の北朝鮮の海州というところの飛行場で終戦を迎えます。しばらくして南朝鮮に移動したあとで、雨の日に小学校のグラウンドを見ていたら、近所の子供がボール持ってきて壁に当ててボール蹴りだしたんです。こっちもその気になって編上靴を履いてグラウンドまで下りていって、二人でボールを壁に向かって蹴って、返ってくるとまた蹴るっていうのをしばらくやりました。戦争終わって最初にボール蹴った時の話です。あのあと朝鮮戦争があつたわけで、あの子は生き延びたのか……。

大学はやめたがサッカーだけは続けた

復員したのは昭和20（1945）年の10月でした。神戸は焼け野原になっていて私の家も焼けてしまい、京都の親戚の家に泊まっていたら、大学の友人から葉書が来た。生きとつたらしいな、10月の何日に西

宮でボール蹴るからバッグ持って来いと、それだけで。それが関西のサッカー復興の最初でした。

軍隊にいる間はひたすら「驀進衝突」して敵の艦船を沈めると覚悟し、若くして人生はそういうものだと思ってましたから、戦争終わったからも帰れと言われたって、どないするんだと。「驀進衝突」して終わりになることになったのに、あとどうするんだという感じでしたね。第413飛行隊の隊長は川上晃良（かわかみあきよし）といって、当時日本で十本の指に入るロッククライミングの名手でしたが、戦後すぐ彼から「帰ってみたけど世の中変ってしまつて面白くない。ただ純粹に必死することだけを考えて演習をしていたあの時期が懐かしい」という葉書をもらつて、それは今でも大事にとつてあります。

しばらくして大学もやめて、正直もうサッカーいっぺん打ち切ろうと思つて神戸大学やめたんですけど、結局あちこちから試合に出てくれとか教えてくれと言われて、大学はやめたけどサッカーだけは続

いていました。「梁山泊」なんて気取っていましたが、実際は何もせずにごろごろしてただけです。

7年の浪々の日々を経てサッカー記者に

その頃一緒にいたのが、今は世界的な彫刻家になった流政之（ながれまさゆき）です。もともとは兄貴の軍隊の友達で、流に会つて僕は世の中には天才というものがいることを知りました。うちの親父の写真見てチャチャチャツと水彩で走り描きみたいを描くとね、それがもう親父の雰囲気をバツとつかんでますから。ものをつかみ方のすごさ、それを絵にしてあらわす能力に、才能とはこんなもんかと思いましたね。神戸一中みたいな学校にいましたから、一生懸命やれば何でもできるようになると。一生懸命勉強して学年で三番ぐらいに入れば、一高・東大へみな行く。そういう学校ですから。だからサッカーも一生懸命やればうまくなるもんだと叩き込まれたのを、サッカーにも天賦の才能というもんがあると、そういう視点

を持てるようになりました。

1952（昭和27）年にスウェーデンからヘルシンボリというチームが来日します。スウェーデンのサッカーにとつてはベルリン・オリンピックで日本に負けたのは今も消えない汚点ですから、当時デグナーという団長が来日して最初の言葉が「1936年のリベンジに来た」という意気込みで。全勝して帰っていききました。そのスウェーデンチームのことを僕がたまたま京都の新聞に書いたんです。

当時流はまだ石の彫刻にいく前ですが、とにかく魅力的な男で話が面白くて、京都の文化人や新聞記者が自然に彼のまわりに集まってくる。文化部だけでなく運動部の記者も来るようになっていました。ちょうどその頃産経新聞が運動・スポーツ面を拡張するためにボールゲームが書ける記者をさがしていた、京都の新聞の記事を読んだ記者が産経の運動部長の木村象雷^{きむらしょうらい}さんを紹介してくれたんです。木村さんはその前の年に特派員としてニューデリーで行わ

れた第1回アジア大会に行っていて、アジア大会の日本代表15人のうち10人が神戸一中出身でしたから、うちの兄貴とも向こうで顔を合わして知ってるわけです。あの賀川太郎の弟かということでも会ってくれて、そういう縁でサッカー記者になるわけです。1952年のことですから、終戦から7年もごろごろしていたことになりますね。

FIFAに直訴し関西にオリンピックを招く

当時日本のサッカーはアジアでもなかなか成績が上らず、人気の面でもベルリンのあとの戦前の黄金期のような注目は集めていませんでした。そうしているうちに1964年に東京オリンピックを迎えることが決まって、開催国の特権で予選が免除されていきなり本番に出られることになりました。しかし全国民が注目するその本番で1勝もできなかったら日本のサッカーは終わってしまうんじゃないか、当時の協会はそれくらい危機感を持ちました。それで打

った手が、デットマール・クラマーの招聘でした。当時日本には一人もいなかったプロフェッショナルのコーチをドイツから招いた。体育の先生はたくさんいましたが、フットボールを教えることを職業としている人は誰もいなかったんです。

日本と同じ敗戦国のドイツの戦後のサッカーの復興は、まず100人のコーチをつくることから始まりました。100人のコーチがそれぞれ100人のコーチを育てれば、ドイツのサッカーは復興するという考えで、戦後のドイツはコーチの育成にものすごく力を入れたんです。その中心にいた一人がデットマール・クラマーで、彼は20代で西部地区の主任コーチになったぐらいですから、コーチの天才だったと思います。教えることに対する情熱とひとつひとつの言葉のうまさ、選び方、そういうことに関しては今思い出しても天才的でしたね。

オリンピックで個人的に思い出深いのは、FIFAに応援してもらって関西でサッカーの試合をでき

たことですね。国の税金使って東京だけ繁栄するのはいかなものかというのが関西人である私の意見でした。これまで他国ではオリンピックの1次リーグの試合を地方で分散してやるのはいくらでも前例のあることだから、関西にもオリンピックの試合をひとつふたつ持つてきてくれと東京の組織委員会に頼んだんですが、剣もほろろでした。そこで一計を案じてFIFAに直訴したんです。当時のスタンレー・ラウスという会長が考えた案がすごいんですよ。準々決勝に負けた4チームを関西に呼んで5、6位決定戦をやったらどうだと。これは東京の日程にまったく関係がないだろう。FIFAもこれなら応援する。とこう言ってくれたんです。4チームの中には準々決勝でチェコスロバキアに負けた日本もいて、ユーゴスラビアとの試合では長居競技場が満員になり（ユーゴに1-6で敗れる。のちの日本代表監督オシムが2得点）、関西協会には当時のお金で600万円ほどが残りしました。それはサッカーを盛んに

するためならいくらでも応援するというFIFAの姿勢のあらわれで、今でも私は感謝しております。FIFAは今いろんなことで大変に採っておりますが、世界中でサッカーを盛んにするという基本姿勢はぶれていないように思います。そういう精神を持ち続けて、何とか盛り返していつて欲しいですね。

クラマーの提言が日本サッカー興隆の礎に

東京オリンピックで日本は1次リーグでアルゼンチンに勝つことができました。たった1勝だったが、デットマール・クラマーは日本代表を強化して、1勝するチームをつくってくれた。そしてオリンピックが終わった1964年11月、日本サッカーはこれからこれだけのことをしていかなくちやいかんということをきつちりと言いつて残して帰国しました。その彼の指針を長沼（健）、岡野（俊一郎）、川淵（三郎）たちがずっと引き継いでやってくれて、日本サッカーが今日ここまで来ているのかと思います。

天皇杯を誰でもが参加できる大会にしたのも長沼たちの仕事で、これは1972（昭和47）年に実現しました。天皇杯は最初は全日本選手権という名称で、大日本蹴球協会が設立した大正10（1921）年に始まり、優勝チームにはイングランドのフットボールアソシエーション（FA）から寄贈されたシルバーカップが贈られました。本場のFAカップ（1871年創設）に倣った勝ち上がり戦ノックアウトシステムの大会で、これを日本協会に登録している大人のチームであれば誰でもが参加できるオープンな大会にしたわけです。大学生がプロに勝つたり、J2がJ1に勝つたりという面白みが毎年話題になりますが、その本質は、日本協会に登録したチームであれば、1年目からでも町や区の予選から出場する権利があり、勝ち上がっていけば優勝する権利もある。そういう世界でも珍しいデモクラティックな大会であるということです。

もうひとつは1976（昭和51）年、選手の登録

を年齢別の個人登録に改めたことです。それまではたとえば中学を卒業して、高校に行けば高体連の大会に出られますが、高校に行かないで働いている子は、実業団チームにでも入らなければ、出られる大会がないわけです。それはおかしいということで、高校だ大学だ社会人だといういわば社会的身分で区切るのではなくて、成長期の子供たちに対してはアンダー14、アンダー16、アンダー18で区切ろうと。今のサッカー記者には実感が薄いかもしれませんが、プロ化をして世界に追いついていく上でこれは非常に重大なエポックな話です。そういう意味でもクラマーが来てくれたことは日本のサッカーがここまで興隆する上での最も大きな礎となりました。

FIFA会長賞受賞。クラマーと最後の対面

今年の1月、チューリッヒでFIFA会長賞の表彰をもらった帰りに、久しぶりにクラマーに会ってきました。僕の顔を見るなりアルバムの一冊を

取って、「これを持って帰れ。俺はもう長くないから」とこう言うんですね。「それはあかん。あんたは4月4日が誕生日やろう」と。彼は僕より半年遅い1925年の4月4日生まれですから。「4月で満90歳になるのやろ。だったら90歳同士で日本でもトークショーやろう」と言ったら、「それを目標としてももう少し頑張ってみるか」と言っていました。

この間は韓国へ行つて僕が神戸一中の5年生で出た1941（昭和16）年の明治神宮大会の話をしてきました。当時朝鮮半島は日本の領土で、明治神宮大会には朝鮮からも台湾からも代表が来ました。決勝の相手が朝鮮の普成中学で、2-2の引き分けで両校優勝だったと言ったら、協会の役員さんからパツとその時の選手の名前が出てきました。張慶煥チヨウケイカンと言つて、1967（昭和42）年のメキシコ・オリンピックの韓国代表のヘッドコーチです。「賀川さん、41年の普成中学には張慶煥がいましたよ」と、こう

ですよ。韓国は歴史を大事にしますね。

当時朝鮮の選手たちは体が大きくて力も強かった。内地では青山師範や御影師範などが強敵でしたが、師範学校には僕らの2歳上の生徒もいたわけです。そういう相手に勝つために神戸一中はショートパス戦術を完成させました。体が小さいというハンディキャップがありますから、ボールを細かくつないで敏捷性を生かして勝つというやり方を鍛えたんです。今の日本のサッカーと同じですね。このことは戦前から同じなんです。

やっぱり歴史を見ることが自分たちの足場がしっかりする、ものを見る目がしっかりすると思うんですね。言い換えれば、自分らのやっていることが何が理解できるようになる。それによつて日本のサッカーはもう一段上へ上ると思うんです。それと今、学校で日本の近代史をほとんど習わないでしょう。入学試験に出ないから。だとしたら自分の好きなスポーツの歴史を調べれば、これはたかだか150年

ぐらいの話ですから、明治から大正、昭和、平成に至る社会史を勉強することになりますよね。日本人は司馬(遼太郎)さんのおかげで歴史の面白さを知りました。サッカーやスポーツの歴史も面白いんです。まあこちらは腕がないから司馬さんほどうまくは書けないですけどね。

(本稿は2015年9月7日、筑波大学東京キャンパス文京校舎で行われた日本スポーツ学会大賞受賞記念講演にインタビューを加え構成した。インタビュー直後の同年9月17日、日本サッカーの父、デットマール・クラマー氏がドイツ・バイエルン州の自宅で逝去。9月19日、20日に行われたJリーグ全試合で黙祷が捧げられ、日本サッカー界は「父」の死を悼んだ)

スポーツの魅力 トラッド&New

2022年夏 賀川浩氏に訊く



ディエゴコマンドーナ氏(アルゼンチン)を取材



ヨハン・クライン・ファン・ノンダ氏を取材

1974年の西ドイツ大会からワールドカップを現地で取材・観戦してきた、最古参のライター・賀川さんが残念ながら今年の大会はテレビ観戦になるという。お電話でW杯の思い出を話していただいた。

——賀川さんにとって、かけがえのないサッカーの魅力とは何ですか？

賀川 スポーツの魅力はもともと非日常性にあるけども、足でボールを蹴るという非日常かな。個人的にはスポーツライターとして国や人がつくり出す歴史を追いつけることが楽しかったし、97歳になってもその楽しさは変わりません。プレーをしても、見ても、語っても最も楽しかったのがサッカーです。

——忘れ難い、今も思い出すシーンがあれば話していただけますか？

賀川 ベッケンバウアーとクライフという2人のスーパースターの対決であり、新しい時代のサッカーを目のあたりにした1974年に西ドイツで開催されたワールドカップの決勝は、初めてワールドカップ現地取材ということもあり、忘れ難いです。ひとつのプレーを挙げるとすれば1986年6月22日、ワールドカップのメキシコ大会でのマラドーナのゴールでしょうか。この日のメモにはこう記して

います。

「超人的なビューティフル・ゴール。そして奇妙な、本来なら成立しないゴール。これもサッカー。これもマラドーナ」

◆ワールドカップ・西ドイツ大会 オランダが『フライング・ダッチマン』と呼ばれた名手クライフを中心に、ポジションにとらわれない全員攻撃・全員守備の革命的な戦術「トータルフットボール」で決勝に進出。決勝はデЙフェンダーが攻撃参加するベッケンバウアーを中心とした西ドイツが、FWミュラーの決勝点でオランダを2―1で下して2度目の優勝を果たした。

◆ワールドカップ・メキシコ大会でのマラドーナ 準々決勝のイングランド戦で、アルゼンチンの25歳のエース、マラドーナはGKと競り合いながら左手で押し込んだとされる有名な「神の手」と呼ばれるゴールで先制。その直後に自陣から5人をごぼう抜きして2点目を挙げるなど、大会通算5得点を挙げ、アルゼンチンに2度目の優勝をもたらした。

ひと

忘れ難い男——サッカーを愛して60年

慶應義塾大学体育会※サッカー部OB

渡邊 隆
(株)東江テクニカ社長

——今年11月、サッカーのワールドカップがカタールで開幕します。日本の上位進出が期待されていますが、今から半世紀以上前にも日本が強かった時代があったのですね。

渡邊 個人の技術レベルは今のの方が上なのだろうけど、昔は俺は絶対に誰にも負けない！ という感じの気骨のある男たちが多かったように思います。

——64年東京、68年メキシコ両五輪で活躍した釜本邦茂さんや杉山隆一さんの名前が知られています。

渡邊 もちろんあの時代を知る人にアンケートをすれば、釜本さんの印象がNo.1でしょう。それに異論はないですが、少し視点を変えると、FW、MF、

さらにDFまでこなすオールラウンダーで、しかもPKの名手で、スローインでは低くて鋭い球を誰よりも遠くへ放った男がいたのですよ。

——今では考えられませんね。どなたですか？

渡邊 おき あり たつ 小城得達選手。日本が3―2で勝った東京五輪のアルゼンチン戦で決勝ゴールを決めた男です。会心のゴールではなく、相手GKが弾いて転がってきたボールを慌てずに決めた。ゴロンゴロンとあたり損ねのようで、泥くさいゴールだった。

私事ですが、中学からサッカーを始めました。高校では大学の先輩が教えにきてくれたけど、必ず中央大学の「小城が凄い！」という話になった。仲間

にボールを出す日本一のフィード。相手の技量を測って、適切なスピードで出すパスはともまねできない……という話ばかり。

——メキシコ五輪で日本は銅メダルを獲得しました。そのときの小城さんは？

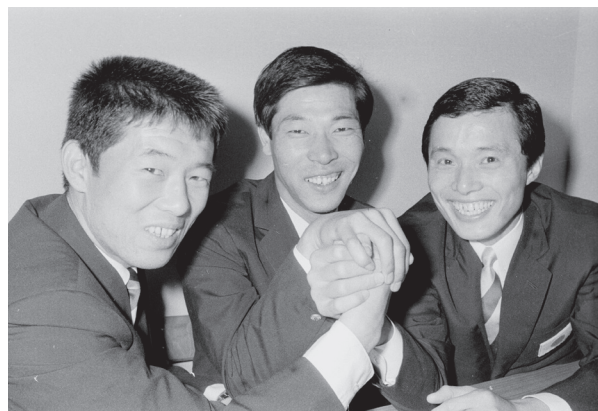
渡邊 メキシコは高地で酸素が薄いことを考慮した作戦で、釜本、杉山のコンビを生かすために、小城さんはセンターバックでした。FWの点取り屋は目立つけれど、サッカーは守備を固めて球を運ぶ道程が味わい深いスポーツだね。その視点で試合を観られるようになる魅力はさらに増すね。テレビは球の行方ばかり追うから、見たいところが見られるわけじゃない。そういえばメキシコ五輪のアジア最終予選のベトナム戦で、小城さんは試合中にヘディングの競り合いでアゴを骨折した。治療してピッチに戻ったけど、顔の腫れ具合がすさまじかった。そこまでして戦うのか?! と心底驚きました。まさに縁の下の力持ちのプレーヤーで、玄

人受けする男^{ひと}だったね。別の言い方をすれば、野獣性を秘めた男だったとも言えるかもしれない。

Jリーグはもとより、今なら海外でも活躍できただろうな、とふと思ひ出すことがあります。今年のワールドカップでも日本に新たなヒーローが生まれることを期待するけど、昔の名選手にも、

もつと光が当てられるといいと思うています。

※慶應義塾大学体育会サッカー部ではなくサッカー部という。



左から杉山隆一、小城得達、釜本邦茂

スポーツの魅力 トラッド&New

愛するフットボールで クラマー氏は何を伝えたのか

河端隆志



2008年、京都清風荘にて。中央がクラマー氏



Es ist der Geist, der sieht.
Es ist der Geist, der hört.
Das Auge an sich ist blind.
Das Ohr an sich ist taub.

観るのは精神である。
聴くのは精神である。
眼そのものは盲である。
耳それ自体は聾である。

1960年、4年後に控えた東京オリンピックの開催に向けて日本蹴球協会(現・日本サッカー協会JFA)は選手強化のために外国人プロコーチを招く計画をたてた。第4代JFA会長・野津謙が西ドイツのクラマー氏の元を訪ねた。そのとき壁にかかっていたのが、この詩だったと言われている。



河端 隆志 (かわばた・たかし) 1960(昭35)年東京都生まれ。医学博士、関西大学教授。運動・環境生理学。身体動作をホールボディー(Whole Body)で捉え、循環血液量が生体の体温調節機能及び運動能力に及ぼす生理学的意義に着目し、環境・運動ストレスに対する生体の適応能力及びスポーツ・パフォーマンスの制限因子と疲労に関する研究を進めている。また、スポーツ動作における2軸感覚と主観と客観のズレに着目した指導方法を提唱している。

2008（平成20）年3月13日、私は幼い息子
を連れてある人物を関西国際空港まで迎えに行つ
た。黒い帽子に黒いコートをまとい、臙脂色えんじのター
トルネックを首元からのぞかせ、黒い鞆たもとを小脇に抱
えた老紳士がゆつくりとした足取りで颯爽とあら
われた。サッカー日本代表の礎を築き「日本サッ
カーの父」と呼ばれたデットマール・クラマー氏
（1925～2015年）である。

小柄ながら眼光鋭く、重厚な空気が彼を包み込ん
でいたが、私の息子に気がつくともるで自分の孫を
観るかのような優しい眼差しに変わり、何やら話し
かけ5マルク紙幣を渡し、息子の左手を柔らかく
握って歩き始めた。後で聞いたのだが、5マルク紙
幣はお守り代わりなのだそうで、今では息子の大切
な宝物となり、写真とともに飾られている。この写
真を眺めるたびに、クラマー氏はフットボールを通
じて私たちに何を伝えたかったのか、そして私たち
に何が伝わり、それが現在どのように継承されてい

るのだろうかという問いかけが私の中で起こる。

実はクラマー氏とは私がプレイヤー、指導者だつ
た時代にもお会いしている。最初は中学生のときに
東京都世田谷区でフットボールの普及活動に努めら
れた故本多秀治氏（慶應義塾大学サッカー部OB）
による多摩川河川敷で行われた講習会※P.33参照で。2度目は
千葉県検見川で行われた全日本大学サッカー連盟の
大学指導者研修会で。3度目のこのときは研究者の
立場で、「技の伝承」に関する研究（研究代表者＝
鈴木晶子・京都大学）を主題とする「第5回日本
フットボール学会」のシンポジストとして、クラ
マー氏を招聘することになったのである。

長い間の深い疑問

それまで私は小田伸午先生（元京都大学ラグビー
部監督。1983年ウェールズ遠征日本代表トレー
ナー）とスポーツ動作における「主観と客観のズ
レ」に関する研究を進めてきた。よく聞く指導法に、

ボールをキックするときは支持脚に体重をかけて足首を剛体化して蹴る、というものがある。この指導に従えば、動きの中でのこの動作は、プレイヤーの意識としてはパス・アンド・ゴールを行っていると感じている。しかし、客観的視点ではパス・ストップ・アンド・ゴールであり、体重が支持脚から蹴り脚にスムーズに移行していない。ここに主観と客観のズレが起こる。この問題は多くの競技種目に共通している。そこでシンポジウムにクラマー氏を招き、日本でどう教えたのか、本人に直接聴いてみるのが一番だろうということになった。

折しも重野幸三郎氏（日本プロサッカーリーグ）から、「クラマーさん、今福岡に来ています。アポ取れますよ」と連絡が入り、すぐに福岡まで駆けつけた。約束の時間に部屋を訪ねると、すでに身なりを整えたクラマー氏が我々を迎えてくれた。少し緊張したが、講演会の趣旨とキックモーションについて話をすると二つ返事で、メモ用紙に日程を走り書

きし、お互いの連絡先を交換してあつけないほど簡単に承諾を得た。その折に聞いたのが、「私はこれまでフットボールに関する生理学、社会学、心理学、栄養学などさまざまな知識を身につけてきたが、その根本となるものはこれまでのフットボールを通しての経験である」という言葉である。当時80歳を超えたおられたので、「体調はいかがですか」と聞いかけると、突然腕立て伏せを始めて、すこぶる万全であると高笑いされた。

適切なアドバイス効果

その後アビスパ福岡ユースの練習をベンチで一緒に観ることになり、「シュート練習でキーパーを置かないのは意味がない」「コーンを置いての練習は意味があるか。コーンは動かない」「確率10%のエリアからシュート練習をするなら、もつと確率の高いエリアでの練習をすべきである」とひとつひとつ話しかけてくれた。ゲーム形式の練習でうまくでき



ない状態を観ていると、突然立ち上がりピッチ内に入ってプレイヤーに話しかけた。面白いようにボールが動き出す。次の動作をしやすくするためにボールをコントロールする（ボールの置き場所）、そして次の場所へすぐに移動する。数分の言葉でプレイヤー全体の流れ、ボールタッチ、姿勢が良くなった。

スポーツの意味と意義

講演会のために来日したクラマー氏とは幸運にも7日間をともに過ごすことができた。来日初日の夜、大阪のビアホールに出かけた。そこで氏は、「戦争用語を使ってスポーツを表現することが見受けられるが、決して使つてはいけない」と熱く語った。

『敵』や『敵地』、『国と国との戦争』などの用語がテレビジョンで平気で使われているのを聴くたびに悲しくてやりきれない思いが込み上げてくる。スポーツという言葉には、もともと『暴力反対のムーブメント』の意味が込められている。したがってスポーツマンは『良き仲間たち』であり、相手がゲームに来てくれることによりゲームが成立するのだから、自然とリスペクトの心が芽生える。ゲームが終わればノーサイド（フットボールは味方のエリア＝on-sideと相手のエリア＝off sideを取り合うゲーム）で、ゲーム後はお互いがひとつとなり、しばしゲーム談義で時を過ごす（after much function）。これがスポーツを愉しむということではないだろうか」と言い、「私は本当の戦争を経験している。戦争はとても悲惨なものである」と遠くを見つめながら論すように話してくれたことを私は忘れられない。

「第5回日本フットボール学会」は2008年3月

15日、大阪市立大学（現大阪公立大学）田中記念館

で開催された。クラマー氏の講演に先立ち渡邊恭良先生の講演「スポーツと疲労」が始まろうとしたとき、クラマー氏が、「渡邊氏の話はとても重要である。今ヨーロッパのビッグクラブは過密日程でプレイヤーの精神的疲労が問題となっている。彼の話はぜひ聴きたいので、Taka通訳をしてくれ」と言ってきた。疲労・疲労感に関する世界的権威である渡邊氏のことをクラマー氏は事前に調べており、氏の常に自分の必要とする情報を見抜く眼差しの鋭さと学ぶ姿勢にあらためて感服させられた。

力と心

クラマー氏の講演タイトルは「The Ultimate Interplay of Sports Science and Football(スポーツ科学とフットボールの究極の相互作用)」というもので、印象的だったのは、「フットボールはエデュケーションスポーツ(Education Sport)」という

表現であった。

人の内面からその人の良いところや人として必要なものを引き出してくれる(educate)力がフットボールにはある。内面から起こる精神面の変化は言動、行動、欲望のコントロール、さらには論理的思考ができるような個の成長を引き起こす。そしてそれは態度の変化、勝ちたいという心(意志)の芽生え、力の使い方(知識)、自己犠牲の精神(心の成長)などにあらわれてくる。フットボールの真の美は、この個を成長させる効果・有効性(effectiveness)にある。精神の成長にともなう個の成長は具体的なプレイにあらわれ、個が成長することでチームは育つ――。

「メンタル」は「フィジカル」

これは一見精神主義的にも思えるが、精神的要素の影響が身体的要素及びパフォーマンスを左右するという研究(猪飼道夫「体力の構成要素」1969

年など)、科学的根拠を理解した上で精神の成長をパフォーマンスの基盤に据えることの重要性を説いているのであり、いまだ一部の日本の指導者にみられる、ハードトレーニングに耐えてその中からプレイヤーが自ら感じ体得する技でなければ通用しないという職人的指導にみる鍛錬主義とは似て非なるものである。言うなれば「そうしろ」ではなく「そうなる」こと、「育てる」のではなく「育つ」ことを理想とする指導法である。

みことなパス・アンド・ゴー

時と場所を移し、京都清風荘で「技の伝承」に関する座談会が行われた。釜本邦茂氏、松本育夫氏、小田伸午氏、中村泰介氏を交えて、キックモーションについて、クラマー氏は支持脚体重で蹴ることを教えたのかという議論では、クラマー氏がサツとその場に立ってゆつくりとキック動作を演じてみせた。それは蹴り脚に体重が移行する蹴り方で、そ

の瞬間、私と小田先生は目配せをしてニヤリと笑い合った。

1960（昭和35）年、日本フットボール界の将来を案じた日本サッカー協会が外国人プロフェッショナルコーチの招聘を決断。彼のような思想、理念、哲学をもつ人間ならという故野津謙氏（日本サッカー協会第4代会長）の直観でクラマー氏の来日を実現した。当時の協会関係者には岡野俊一郎氏、長沼健氏、平木隆三氏、三村恪一氏ら知的感受性に富んだ若者たち（いずれも故人）がいた。彼らは1953（昭和28）年、日本サッカー界が戦後初めて約2カ月に及ぶ長期海外遠征（ドルトムント遠征）に送り出した学生選抜のメンバーで、彼らの熱情がクラマー氏の成功を少なからず支えたとは私は考える。こうしたご縁と歴史の積み重ねの上に新たな日本フットボールの発展が積み重なることを切に願うものがある。



スポーツの魅力 トラッド&New

アーバン(都市型)スポーツ『ロボッチャ®』って何!?

ポッチャで使用するボール。

取材 田村崇仁



ロボッチャで使用するボール。
ポッチャの約1/10サイズ。



田村 崇仁 (たむら・たかひと) 共同通信社運動部デスク。1973(昭48)年、群馬県高崎市生まれ。早稲田大卒。1996年共同通信入社、2002年W杯までサッカー担当。プロ野球、日本オリンピック委員会(JOC)担当を経て、13年からロンドン支局駐在。国際オリンピック委員会(IOC)や国際パラリンピック委員会(IPC)の他、テニスやゴルフを含む欧州スポーツ全般をカバーした。柔道女子代表の暴力・パワーハラスメント問題取材班(代表)で新聞協会賞受賞。

パラリンピックの頭脳競技、ボッチャとロボッチを組み合わせた、その名も「ロボッチャ®」Roboccia」というユニークな「次世代型スポーツ」が日本で初めて考案され、競技普及への一歩を踏み出した。

ルールは基本的にボッチャと同じだが、使うボール（約28グラム）とコート（1.25m×0.6m）は10分の1サイズ。室内でテーブル一つあればいつでもどこでも手軽に競技を楽しめるのが魅力で、年齢や性別、障がいの有無などの枠を超えて、誰もが参加できる「都市型スポーツ」とも呼べるだろう。

競技者は人間の手ではなく、上投げ型、下投げ型、キック型と種類がある投てき用のロボットを活用し、1投ごとにタブレット端末のプログラミングで指示を与えてゲームを進行する。勝負は赤い球と青い球を6球ずつ投げ、最初に投じた白いジャックボール（目標球）にどちらがより近づけて得点できるか――。ボールを投げる強さや角度はロボットの

プログラミングでそれぞれ自在に調節し、状況や場面に応じた戦略を考えて対決してくのが醍醐味だ。

STEAM教育の要素、失敗から学ぶ力

8月2日、渋谷区総合文化センター大和田で開催された講習会ではロボッチャがお披露目され、8人の小学生らが参加。4月に設立された一般社団法人、ロボッチャ協会の岡本弘毅代表理事が試合前の説明で「大切なこと」と題して強調したのは4つの項目だった。

「トライ&エラーを何度も繰り返すこと!」

「戦略を考えてプレーすること!」

「チームでたくさん相談すること!」

「相手のことを考えて競技を行うこと!」

岡本氏が「ロボッチャはテクノロジーを使った教育ツール」と言う通り、Science（科学）、Technology（工学）、Engineering（技術）、Art（芸術）、Mathematics（数学）を統合的に学習する「S

TEAM教育」の要素を取り入れているのが大きな特徴でもある。

特に大事なものは試行錯誤して失敗から学び、答えを導き出すこと。人間の手で動かすのではなく、ロボットを使って動かすことで、スポーツを通じた真剣勝負を楽しみながら創造的なアプローチや問題解決に取り組む論理的思考を学び、インクルージョン（包摂）やダイバーシティー（多様性）が求められる時代の人材育成に主眼が置かれている。

子どもの吸収力と柔軟性に驚き

夏休み期間中、多数の応募者から新型コロナウイルス禍のため厳選された子どもたち8人は1チーム2人ずつに分かれ、レゴブロックを使ったロボットを見よう見まねでいじり出すと、途端に目の色が変わった。小学1年生と幼稚園児コンビや少し大人びた6年生もいる。そんな年齢差も関係なく、初対面でチームを組んでもロボッチャを通じて自然と会話

が始まり、投てき用ロボットの改造にも乗り出していく。やはりスマホ世代はデジタル機器への抵抗感もないようだ。

「モーターのパワーってこれぐらい?」「回転はこんな数値でいいかな?」「転がした方が距離感が合うんじゃない?」。そんなやり取りをしながら、タイヤを付けて高さを変えたり、角度を変えて距離を伸ばしたり、カラフルなデコレーションで可愛くしてみたり…。無数に可能性がある組み合わせを考えて、直感的に創意工夫を凝らす吸収力と柔軟性には驚くしかない。準備時間を終え、いよいよ交流試合が始まると、互いのチーム戦略を探りながら、まさに「ガチンコ対決」で火花を散らす様子は見ていて実に面白く、興味深かった。

幼少期から社会人まで幅広い年齢層の「教育支援プログラム」に取り組む株式会社エデュソル代表でもある岡本氏は「（機器に不慣れな）大人がやると頭で考えすぎて、ああはならない。子どもたちが手

を動かしながらハンズオンで物事を考えていくことがすごく重要です。最初は静かだけど、目的を達成するためにチームで話し始め、すぐに仲良くなり、けんかもする。そして最後はもう一回仲良くなる。社会や企業チームのフロー（流れ）と実は同じです」と笑いながら解説した。

2年前から開発着手、スギムライジングもヒント

もともとボッチャとは、イタリア語で「ボール」を意味し、重度脳性まひ者や四肢重度機能障がい者向けに欧州で考案されたパラスポーツだ。対戦型の競技で冬季競技のカーリングに似ているため「地上のカーリング」と呼ばれることもあり、障がい者と健常者が真剣勝負できる唯一のスポーツといわれる。

ボッチャでは手で投げられない選手は、介助者のサポートを受けながら「ランプ」と呼ばれる滑り台状の投球補助具を使ったり、蹴ったりもできる。そんな子どもからお年寄りまで楽しめ、インクルーシ

ブ教育の入り口ともなる頭脳戦のボッチャをテクノロジーと融合してもつと世間に広められないか――。ロボッチャ開発のアイデアは2年近く前から生まれ、具体化していったという。

会場でボッチャの大会を視察しながら、インスピレーションを受けたのが、東京パラリンピックのボッチャ個人で金メダルを獲得した杉村英孝選手の必殺技「スギムライジング」だったという。新語・流行語大賞のトップテンにも選出され、密集しているボールの上に自分の投げた球を乗せる大技だ。岡本氏は「杉村さんのスギムライジングを見て、あれをロボットでやったらめっちゃ面白い。東京パラで見て、これは広げていきたいと思った」と振り返る。

それでも、いざ開発に着手するとハードルは思いのほか高かった。5分の1サイズから7分の1、8分の1と改良を重ねながら四苦八苦し、現状の10分の1サイズの形にまでたどり着いたのは、試行錯誤した結果だった。

学習環境支援ツールの開発などに携わり、ロボッチャの事業推進を支援する(株)スコップの金子薫平代表取締役は「教育」ツールとしての可能性を期待する。「今の形になったのはこの数カ月ぐらいでまだよちよち歩き。レゴを使って遊ぶ感覚もあり、もともとは小学生を対象にしているが、インクルージョンを目指す以上、年齢も関係なく、誰もが学べるコンテンツとして可能性がある。トライ&エラーを重ねて論理的思考を鍛えられ、企業の人材教育にも使える。終わった後はノーサイドの精神。プログラミングというと構えてしまうが、タブレット端末を使って思った以上に抵抗感はない。ポテンシャルはすごく感じている」と強調した。

最近のテレビ番組では、ロボッチャの杉村選手とスリング女子五輪金メダリストの吉田沙保里さんがロボッチャに挑戦。プログラミングの調整に四苦八苦しながら、新しいロボッチャの世界を紹介する企画もあった。

1万人プロジェクト、ロボッチャも後押し

日本ロボッチャ協会は東京パラ開催に合わせ、ファイン獲得を目指す「みんながロボッチャ1万人プロジェクト」を展開し、試合やイベントの情報発信に力を入れてきた。

日本協会事務局長で、ロボッチャ協会理事も務める三浦裕子氏はそのキーマンの一人でもある。「ロボッチャは汎用性のある競技として教育的意義が高く、教育分野との組み合わせが最適。ロボッチャはテクノロジーの領域と組むことで、ロボッチャの可能性をも広げて」と普及への後押しになると歓迎する。

日本協会によると、ロボッチャの会員登録数は約3800人。ただ健常者の愛好者も含めると、その倍以上に増えているという。三浦氏は「ロボッチャは普通のロボッチャと同じように、一緒にやることでコミュニケーションがとれる。最初の入り口は小学生が対象でも、ロボッチャを知ってもらいたい機会

になる。とても素晴らしい教育ツールで後押しになるし、レゴは北欧生まれのおもちゃでもあるので、そういうところとコラボできたら面白いんじゃないですかね」と今後の海外展開も視野に入れる。

ボッチャは今後の構想として、学校の指導要領に取り入れてもらう目標設定があるという。走るのが苦手な子でも、文化系の子でも一緒に協力しながら競い合える。こうした教育的要素はロボッチャにも共通するアピール材料だ。

将来的にはロボッチャも1万人規模で愛好者を増やしていく目標を掲げる。岡本氏は「小学生、中学生、高校生、大学生と広げ、企業も会社単位で大会に出てきてもらえたら。垣根を越えて社会人と小学生が戦っているとなれば、面白くないですか?」と夢を語った。

一方で課題は競技の環境整備だ。キットもまだ一般販売していない。三浦氏は「機材の費用が少し高く、ボールも手作り。キットがそろっていないと

全国的に広がっていない。教える人も絶対必要です。まずは受け皿を作ってから、全国に展開していく流れがベストかなと思う」と指摘した。

究極のゴールは「人間対ロボット」

ロボッチャの「究極のゴール」はどこにあるのだろうか――。そんな質問を投げかけると、岡本代表理事は「人間対ロボットの対決」と回答した。

通常のボッチャのコートとボールを使い、ボッチャの世界1位とロボッチャの優勝者が争うようなイメージだ。「来年には一発目の勝負をしたいと思っている。まだ勝負にはならないぐらい人間の方が強いと思う。ここからどれぐらいブラッシュアップできるか」と現状を受け止める。

三浦理事も「いずれはボッチャ日本代表を倒すロボッチャの誕生も楽しみに」とコメントしている。ロボッチャの夢への挑戦は、まだ始まったばかりだ。

『走』第3回



自動車レースは、安全運転を競う競走!?

玉木正之

最高時速300 km以上。平均時速200 km前後で、周回コースを2時間近く走り、「速さ」を競うF1（フォーミュラー）レース。

その世界最高峰の自動車レースに、日本人初のフルタイム・パイロット（年間10レース以上あるレースのすべてに参加したドライバー）として活躍した中嶋悟さんに、公開デイスカッションの席で質問をしたことがあった。

「時速300 kmでマシンを走らせているときの感覚というのは、どういうものですか？」

曖昧な質問だが、丁寧な答えが返ってきた。「雪が降ったあとのアイスバーンになった道路ではタイヤを滑らせてハンドルを取られたり、

クルマを横滑りさせてしまうドライバーが多いよね。でも、そんななかでタイヤをコロコロと上手く回転させてクルマをきちんと走らせているドライバーもいる。F1に限らず自動車レースというのは、そういう運転をするドライバーの競走なんですよ」

続けて私は、こんな質問を口にした。

「だったら、自動車レースって、速さを競っているのではなく、安全運転を競っているのですか？」

「はい。そうです」中嶋さんは、平然と答えた。

「事故ったら、勝利も何もありませんからね」

確かに。現代社会では「走る速さ」そのものには意味がなくなっている。情報を別の場所に早く伝えたいなら、携帯電話もあれば電子メールもある、モノを早く届けたいならドローンもある。

だから自動車レースは、ツルツルと滑りやすくなってしまう猛烈なスピードを競うなかでも、より安全に自動車を走らせる方法を追求する競技になった、ということのようだ。



夢劇場『馬』

No.28



チャンス到来か!?

長田渚左

長きにわたり可能性が低い……と信じられてきたことに、何かの拍子で風穴が空く……とその後に続々と後継者が出る。

例えば大リーグでの日本選手の活躍や、陸上の男子100mの10秒の壁の突破などだ。そう言えば今夏の高校野球では100年以上も叶わなかった東北勢の優勝が実現した。

こうなると日本ホースマンの長年の夢である凱旋門賞で日本馬の悲願達成もありか……? と欲が出る。

凱旋門賞への日本馬の初参戦は1969(昭和44)年で、故野平祐二を背にしたスピードシンボリだった。成績は着外(11着以下)で、世界との差を見せつけられた。その頃の日本競馬について

野平氏に取材をしたことがある。彼は苦々しにがたがそうに振り返った。「外国の騎手から『日本に行く』と立派なバンビに乗せてもらえる」と言われまして。サラブレッドではなくバンビ!?

強い日本馬育成のためにスタートした'81年ジャパンカップでは上位4着までを外国馬が独占。調教師になつていた野平氏は悔し涙を流した。

「完璧なまでに打ちのめされた。日本の馬の関係者として絶望感が深い」

初挑戦から50年以上が経過し、今年はタイトルホルダーが主要ブックメーカーのオッズで、一時1番人氣に押された。

'99年に頂きへ半馬身差の2着までつめたエルコンドルパサーを手本に、逃げて、逃げて、逃げまくるレースに持ち込めば、日本の馬に勝機を呼び込める気がする。

この56号が皆さまの手元に届く頃には結果は出ている。高校野球の「白河の関」ではないが、凱旋門賞のトロフィーもそろそろ海を渡ってほしい。



バックナンバーのご案内

バックナンバーを、直接お申し込みいただけます。ご希望の号と冊数を明記し、送料分の切手を左記にお送りください。

〒352-0011

埼玉県新座市野火止8-16-32

株式会社東美物流

『スポーツゴジラ』係

送料値上がりのため45号より変更しました。

10冊まで 送料 400円

20冊まで 送料 700円

40冊まで 送料 1200円

※特集の内容は本誌巻末カラーページとホームページに記載しています。

【ホームページ】

<http://sportsnetworkjapan.com/>

★お申し込みいただくとき『スポーツゴジラ』への感想もお書き添えいただけると幸いです。

次の冬号第57号は2022年12月

下旬刊行を予定しています。

また、バックナンバーは品切表示の号も左記の図書館で読みになります。ご利用ください。

●世田谷区八幡山・大宅壮一文庫
●世田谷区深沢・日体大世田谷キャンパス図書館

●港区広尾・東京都立中央図書館

●千代田区永田町・国立国会図書館

●港区芝・東京都人権プラザ図書館

●新宿区霞ヶ丘・日本スポーツ協会資料室

【理事】

五十嵐二葉（弁護士）／池井優（慶應義塾大

学名誉教授）／伊藤順蔵（早稲田大学名誉教授）

／岡田匡令（淑徳大学名誉教授）／長田清左（ノ

ンフィクション作家）／笠原一也（日本オリ

ンピック・アカデミー名誉会長）／菊幸一（筑

波大学教授）／佐久間昇二（びあ株式会社取

締役）／重村一（㈱ニッポン放送取締役相談役）

／永井憲一（法政大学名誉教授）／山口香（筑

波大学教授）／山口良治（京都工芸学院高校ラ

グビー部総監督）

【事務局】

〒359-1192

埼玉県所沢市三ヶ島2-579-15

早稲田大学スポーツ科学部太田章研究室気付

皆様、ご存じですか？

スポーツゴジラは年4回春・夏・秋・冬の季刊で発行。

都営地下鉄・大江戸線・浅草線・三田線・新宿線の各駅、全国の大学102カ所に設置されています。

スポーツゴジラ®

2022年10月3日発行

第1巻第56号

無断転載・転売を禁じます

企画編集 スポーツネットワークジャパン

長田清左・川本凜太郎・阿部雄輔

波多野圭吾・西本祥子・江川卓美

山内亮治・鈴木希人

制作 有限会社ナトリック

印刷・製本 株式会社 美松堂

発行 スポーツネットワークジャパン

お問い合わせは左記まで

特定非営利活動法人

スポーツネットワークジャパン

〒168-0063

杉並区和泉1-40-13-401